

開拓使の財政再建に貢献した

松本十郎

明治初期の札幌は、大変な不景気で、人口は四百人足らず。こうした状況から、百八十万都市へ発展するきっかけをつくり、桑園地区の開拓に寄与した松本十郎を紹介します。

松本十郎は天保十年（一八三九年）に庄内藩（現在の山形県鶴岡市）の藩士の子に生まれました。幕府側の一員として戊辰戦争に従軍した後、明治二年（一八六九年）に開拓使が設置されると、開拓使次官の黒田清隆に傑出した才能を認められ、開拓判官の一人に任命されました。

この年の十月、東京から百人余りの移民団を率いて根室に到着した松本は、住民に新しい郷土への愛着心を芽生えさせようと、刑務所を建てて治安を守ったり、税率を引き下げたりしました。また、漁場の開放や病院・学校の建設を行い、生活改善にも力を注ぎました。松本は開拓の理念を次のように語っています。



松本十郎
（札幌市教育委員会
文化資料室所蔵）

「開拓とは田畑を開くだけを言うのではなく、また漁業で金もうけをすることだけを言うものでもない。人の心を北海道に根付かせることこそ、その基礎だというわけです。そのためには税金を軽くし、規則などはことさら設けず、実状を詳しく調べもせずにお上があればこれ言うことではない」（「蝦夷藻屑紙」より）。

六年（一八七三年）一月には、大判官に任命され、札幌へ赴任しました。当時、札幌本庁は四十一万円以上の負債を抱えていました。米十_キの値段が三十二銭余り（現在、約四千三百円）のところで、膨大な額の負債であることが想像できます。しかし、松本は人員削減を含む厳しい緊縮財政と新規事業の凍結

という政策を実施して、わずか一年半で負債を清算しました。

また、経済も不況で、貧困のため逃げ出す住民が続出し、一時九百十六人いた人口が同年末には三百九十六人に激減しました。そこで、松本は故郷の旧庄内藩士五百人を桑園の開拓に従事させたほか、製網業を興し、農園を開くなどさまざまな公共事業を展開していきます。こうした必死の不況対策により、九年からは、次第に人口や景気も回復していきましました。

松本は、住民から大変信頼を集めていたと伝えられています。根室時代には、「アッシ判官」と呼ばれ、親しまれていました。これは、アイヌ民族の「厚司」という着物を羽織って視察をし、アイヌ語で会話をしたからだといわれています。しかし、細かいところまであれこれ指示するので、役人の評判は良くなかったようです。

十年（一八七七年）になると、アイヌの移住問題から黒田と対立し、松本は大判官を自ら辞して故郷に帰りました。その後、四十年間の生涯を農民として過ごしています。どの土地どの時代においても、

くわを振るい田畑を耕し、農作物をやることこそが、人間社会を支える根本であるという信念だったのでしよう。

（平成十三年八月号・第七十八回）